ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

データが指し示す先-27-（米国株式市場の行方）

ご存じの通り、10 月 10 日、11 日とＮＹダウが急落しました。2 日間の下げ幅は 1,377 ドル、率にして 5.2%の下げでした。そのあおりを受け 11 日の東京市場で日経平均は 915 円の下げを演じ、世界の株式市場が一気に不安定化しました。その流れは今も続き上げ下げの振れ幅が大きくなっていますが、こうした株式市場の動きは何を示しているのでしょうか。その行方を占ったり当てたりするのは困難ですが、株式市場が語っているものに素直に耳を傾けることは大切だと考えています。

今回は、1990 年末のＮＹダウを起点（0%）として、先月末までの上昇率をグラフにしてみました。日経平均も重ねてみようと思ったのですが、あまりに掛け離れて比較にならないので止めました。

いかがでしょうか。1990 年末のＮＹダウは 2,633 ドルでした。その後、色々ありましたが、それを含めて表にしたのがＨＰにありましたので借用したのが下のグラフです。小さく且つ歪んで見づらいかもしれませんが、超長期の動きが見えて参考になると思ったのです。

こうしてみると、02 年の不正会計事件（ワールドコム破綻）と 09 年のリーマンショックによる下落が目立ちますが、それ以外は若干の急落はあるものの一貫して上昇トレンドにあるように見えます。実に、1990 年末と比較して先月末で 953%の上昇率となっています。この間、日経平均はマイナスに沈んでいますので、あまりの違いに驚くばかりです。何が原因なのか。良く指摘されるように、日本がバブル崩壊の余波に苦しみ、新たな変化・イノベーションを起こせなかったことは否定できないと思います。この 28 年、時価総額上位 10 社の顔ぶれは日本ではあまり変わっていないの対し、米国では激変していることがそれを証しているのではないでしょうか。

それにしても、これだけ動きが異なる日米の株価も、短期的には連動性が強い。経済状況も企業の利益水準も違うのに株価は連鎖する、何故でしょうか。ある人が云っていましたが、「株価は時間的に経済の最先端を走っている」からかもしれません。そこでは株価は経済動向の最も鋭敏な指標そのものなのでしょう。だから株価動向に注目が集まると理解すれば理解しやすい。

日本のバブル崩壊による株価暴落、リーマンショックによる米株価暴落を眺めると、落ち始めた株価が底を打つのにかなりの時間を要しています。そうしてみると、今回の超過剰流動性逆流による株価急落も未だほんの始まりに過ぎないかもしれません。特に、恐ろしい位に上昇してきた米国の株価は、理論的な企業価値の上昇を遙かに上回っており、それを修正する動きが必ず出てくる、そう見ておく必要があります。もう一度、二つのグラフを見て下さい。この先何が起こるか見えてくるようです。